

新版教科書でこんな授業をしてみたい

じっくりと作品の世界に読み浸らせたい

五下「わらぐつの中の神様」(杉 みき子)



17年度版「国語」五下 「わらぐつの中の神様」

この教材には、時代の違いや場所の違いを超えて迫りくる価値がある。それは、「値打ちある生き方とは何か」を問うもの、「人の幸せとは何か」につながるものである。働くことを愛し、人の身になって考え、人間の値打ちは外見ではなく心だと思っっているおみつさんと大工さんの織りなす、健康で素朴な愛の物語なのである。

おばあちゃんの優しい語り口調と方言の醸し出す雪国独特の世界が、理想的ともいえるこの愛の形を、無理なく読むものに届けてくれる。「みつたくない。」とわらぐつを嫌うマサエ。子どもたちは、自身を見る思いで読むであろう。しかし、「心を込めて作ったものには神様が宿る。それを作った人も神様と同じ。」という象徴的な言葉が、子どもたちの心に一本の楔を打ち込む。贅沢を言わず、くるくるとよく働くおみつさん。雪けたを買つたためにわらぐつを編むひたむきな姿。大工さんの仕事に対する姿勢と考え方。子どもたちが、日ごろからそれほど意識しなかった大切な

ことへの思いが、心の奥底からふつふつと湧き上がってくるに違いない。

現在を生きる子どもたちの将来の夢が、「大工さん」に代表される「職人」に向けられ始めていることは、平成不況の中の当然の傾向であると同時に、自分自身の手で何かを創り出すことへの憧れであるのかもしれない。ますますコンピュータ化される世の中で、ゲーム遊びに心奪われている子どもたちにとって、この教材のもつ意義は大きいと考える。

また、この教材は、「人との出会いや触れ合いが人を成長させる」ことを教えてくれる。価値ある出会いとは、自分自身の価値観が生み出すものであることに子どもたちは気づくであろうし、先人の知恵に助けられて自分が成長させられていることにも気づいてほしいと思う。

このような内容的な価値をもつと同時に、この教材は、現在の場面の間におばあちゃんの昔語り(狭まる形)で構成されており、この独特な文章構成が作品の世界をよ

り深いものになっている。このような作品の特徴に着目させながら、物語における描写が人物像を豊かに描き出すことに気づかせ、登場人物の人物を中心に叙述に即して読む力をつけさせたい。

新学習指導要領に即して初めて作られた平成十四年度版の教科書では、読むことを中心にした単元にも他領域の活動が組み込まれていた。本教材でも、発表したり書いたりする活動が位置づけられており、読むことに充てられる時間が少なかった。

豊かな内容的価値をもつこの作品は、時間をかけてじっくり読み浸らせたい。幸い新しい教科書では、学習のねらいが読むことに絞られ、さらに時間も十分に配当されているので、子どもたちもじっくり作品に取り組むことができ、前に述べたような味わい深い読みの学習が展開できるだろうと期待している。

